

1995年度

トラークル協会会報

第1号

1996年 3月

トラークル協会

〒271 千葉県松戸市栄町西2-870-1 日本大学松戸歯学部独語研究室気付

TEL 0473-68-6111 (内線446)

1995年度秋季研究発表会発表レジュメ

トラークル〈Verfall〉の周辺

— 〈Verfall〉の成立とボードレーンとヘルダーリン

高橋 喜郎

1914年に、27歳の若さでこの世を去った詩人トラークルにとって、22歳の時に代表作の一つである〈Verfall〉(ほろび)の第1稿が書かれたことは、それ程奇異なことではないかも知れない。

しかし、エーリッヒ・ボリがその広範な論文の中で、「トラークルが、彼独自の詩形を確立するのは、1912年の秋以降である。」という発言をしているが、これを考慮し、この詩の成立に関する他の詩人の影響を考えてみることも、あながち無意味ではないだろう。

1909年の詩集と、トラークルが自選し、カール・レックによって出版された詩集を比較した場合、1909年の詩集において、ソネットの詩形が多用されていることは顕著である。つまり、1909年以前、トラークルはソネットという詩形を愛好していたか、もしくは、その詩形による表現の可能性を追求していた可能性は十分に考えられる。

ヴァイクセルバオムの正確かつ実証的な伝記によると、トラークルが、フランス語を読み、書き、話す程習熟していたことは、確かであるが、ソネットという、フランスの詩人に愛好された詩形を、フランスの詩人たちから習得したとは、年齢的に言っても考えにくい。

オットー・バーゼルが指摘しているように、トラークルの蔵書の中には、リルケの〈Neue Gedichte〉があった。このソネットを多数含む詩集が、1907年に刊行されていることを念頭に置くなら、トラークルが、リルケの〈Neue Gedichte〉の影響を強く受け、ソネットを多作したと考えるのが妥当ではないだろうか。

しかし、〈Verfall〉の初稿〈Herbst〉(秋)には、内容から言って、ボードレーンの〈Chant d'automne〉(秋の歌)の影響があったと思わざるをえない。特に秋と減びというテーマの一致は見のがせない。また、詩句のレベルでは、〈Herbst〉と同じ

ソネット形式で書かれた << Sonnet d'automne >>(秋のソネット) の影響が考えられる。特に、この詩の第4連に詩人と近親相姦の関係にあったとされる妹の名 < Marguerite > が出てくる。(妹の名 Margarete をフランス語風につづるとこうなる。) この詩が、トラークルに強い衝撃を与えたことは、想像に難くない。それは、<< Herbst >> の最終行と << Sonnet d'automne >> の第4連の詩句を厳密に比較することから、明らかになる。

<< Herbst >> は、第1連、第2連の平穏な秋の情景と第3連、第4連の衰滅の予感させる情景という風に、前半と後半が、明確な対照をなしている。このような劇的な転調はトラークルの詩業全体から見ても特異と言えるだろう。

ヘルムート・グムタウが指摘しているように、トラークルは、1905年に発刊されたヘルダーリン詩集を熟読していたにちがいない。ヘルダーリンの詩の中でも特に有名であり、詩のアンソロジーなどにも収録されている << Halfte des Lebens >> (人生半ば) は前半の7行と後半の7行が、明確な対照をなしている。

主に詩の構成という点でこの詩も << Herbst >> の成立に影響を与えたと考えられる。この詩の最後の三行も、やはり << Herbst >> の最後の1行と似た響きを持っている。この点からも、この詩も、意識的か無意識的かは別として、<< Herbst >> の成立に関与していたことは否めないような気がする。

○この発表に対して、又これに関連して出席者の中から次のような意見、感想があった。

1. 一般に文学における影響関係は論証が難しい。
2. ボードレールの詩「秋のソネット」の「秋」に対する影響の蓋然性は高いのではないか。
3. 一般にトラークルの場合ボードレールの詩よりランボーの詩の影響が強いのではないか。
4. 一般にトラークルに対するノヴァーリスの影響をもっと考慮すべきでないか。
5. 影響関係より独自性を論ずるべきではないか。

1995年度活動報告

1. 5月13日トラークル協会設立準備会が東京の池袋で開催される。

出席者：石橋道大、伊藤卓立、植和田光春、三枝絃一、高橋喜郎

ここで会の名称、目的、活動、会則、組織・運営、会費、会員募集等について話し合われ、おおよその方針、方向が決められ第一回総会において更に討議され決定されることになった。また幹事として伊藤卓立、三枝絃一、高橋喜郎が委嘱され総会において追認されることになった。

第一回総会及び研究発表会が 9月20日12時から北大で開催することに決定された。

2. 7月18日第一回幹事会が東京の新宿で開催される。

出席者：伊藤卓立、三枝絃一、高橋喜郎

ここで研究発表会の発表者の募集、会費の徴収方法等について話し合われた。

3. 9月20日12時より第一回総会及び研究発表会が北海道大学言語文化部 301号室で開催される。

出席者：石橋道大、伊藤卓立、植和田光春、三枝絃一

総会：(1) 会則を決定 (2) 会長（代表幹事）は当分置かず、幹事（伊藤卓立、三枝絃一、高橋喜郎）を追認 (3) 事務局は日本大学松戸歯学部独語研究室気付、係は三枝絃一に決定 (4) 研究発表の内容、形式として論文、研究ノート、中間報告、問題提起、書評、今までに発表した論文の解説の他、合評、帰朝報告等を加えることに決定 (5) 会報は年度末発行、内容は総会・研究発表会の報告、会員消息、小論文、書評、研究発表したもののレジュメ、随想、帰朝報告、次回の総会・研究発表会、及び発表内容（問題提起、論の核心）の通知、会計報告、編集後記等に決定

研究発表会：高橋喜郎「Verfall の周辺」（三枝絃一代読）

（総会が長引いてしまったので、三枝絃一「G. トラークルの詩における Reihungsstil(Zeilensstil)について」は次回に持ち越しとなった）

4. 3月15日第二回幹事会が東京の新宿で開催される。

出席者：伊藤卓立、三枝絃一、高橋喜郎、他にオブザーバーとして中村朝子

本年度会報、春の例会、会費の件等について討議された。

5. 3月31日本年度会報が発行される。

お知らせ

1. 会報に会費用の振込用紙を同封しましたのでよろしくお願ひ申し上げます。なお95年

度会費未納の方がいらっしゃるかもしれませんが、御納入のほどよろしくお願い申し上げます。

2. 春の例会は次のように行われます。

日時： 5月10日（金）午後 2時より 4時30分迄

会場： 明治大学 和泉校舎 研究棟（部屋は今のところ未決定ですが、当日研究棟に掲示します）

総会：（議題は第二回幹事会結果報告参照）

研究発表会：

(1)三枝絏一「G.トラークルの詩における Reihungsstil(Zeilensstil) について」合評
（対象論文については予め会報と共に送ります）

(2)中村朝子「報告」--- ザルツブルクを実際に歩いて感じたトラークルの詩の世界と
のかかわりを、特に彼の詩の中に現れる都市の形象を中心として報告したい ---
（懇親会も予定していますのでふるって御参加下さるようお願い申し上げます）

3. 秋の例会の発表者（論題）を募集しています。論題の締切りは 8月末日です。

編集後記

曲がりなりにも会報をお届けすることができましたが、内容、体裁とも貧弱であることはどなたが見ても明らかです。しかし今のところこれが精一杯に近いというのが正直のところでは。これは一重に編者の力量不足に帰せられます。会報を出す段になってようやく編者はレイアウトや両面コピーや綴じ方などワープロ仕様の技術を正に泥縄式にかろうじて習得したこともその一因であります。来年度の会報はもう少しましなものにしますので御容赦下さい。なお春の総会において、この会報について、また今後の会報の在り方についても御意見をいただければ幸いです。

さて本会が成立して二年目を迎えましたが、これまでの経緯のなかで感じたことを若干述べさせていただきます。昨年二月トラークル協会設立の趣意書を、過去二十年の「ドイツ文学」の巻末の寄贈文献目録からトラークルについて論文を書かれていらっしゃる方約40名にお送りしました。そのうち約10人の方から設立されれば入会するという御意志を示して下さいましたが、思っていたより大家の方が多く、それに反して少壮の方が少なくやや意外な感じがしました。また入会する御意思の無い方は、多忙であることと関心が他

の方面に移ってしまったことを主にその理由として挙げられていましたが、後者の場合いろいろ考えさせられました。最近は一人の詩人に入れ込む研究者は少なくなっているのではないか、あるいはこれはトラークルという詩人の特殊性にあるのか、つまりその作品の絶対量の少なさ、あるいは一般に言われている難解さ、あるいは研究のしにくさ(二次的資料としての書簡、日記などの生活記録の過少、詩人自身の文学や社会に対するコメントの無さ等に多くこれは起因しているものと思われまゝ)。むしろ後者の面が強いように思われます。いずれにせよ、思っていたより現在はトラークル研究家の数が少ない気がします。トラークルはウンツァイトリッヒなのでしょう。確かにその詩(特にその初期の作品)における伝統的なロマンチック性の残滓、或いはキリスト教的な粹組み、その倫理性等は古いと言え古。また詩の重苦しい暗い情調は若い世代には合わないのかもしれない。しかし再びの世紀末(世紀転換期)を迎えている今日、この詩人も見直されてもいいのではないのでしょうか。たしかに世紀末は曆上のことに過ぎないと切って捨てることもできますが、意識が存在を決定する面もありますし、「世紀末」はヨーロッパに限定されていましたが、今世紀末は地球的規模で進行していると見るのも可能でしょう。ドイツでは今世紀末(世紀転換期)を *Jahrhundertwende* と言わず *Jahrtausendwende*(千年紀転換期と訳せましょうか)と言っていますが、その規模の大きさを表現していると思います。全世界的規模で進行しているこの状況がトラークルの詩想と同調するように見えるのですがいかがでしょう。

会員にはトラークルの専門ではない方が何人か入っていますが、その中には、こういう会を作りましたと申しますと、入会を勧めない内に「入ります」と言われた知人もおります。やはり研究者も論理のみならず、人情やコネでも動くということを実感しました。

ある独文学者の会でのことですが、ある方(勿論会員以外の人)が本会の設立を御存知で「そういう会は結構なものであるが、長続きするのは少ない」と言われました。もっともなことではありますが、それを聞いてなお存続させたい気がおきました。アクティブな方が四、五人以上纏まるのが、このような会を長く存続させるための最も重要な条件であることを痛感しています。

以上編集後記としては長すぎ、またその性格からも逸脱した感じになりまして、内心忸怩たるものがありますが、お許し下さい。(さ)

トラークル協会会員名簿

(1996.3.31 現在)

石橋 道大	
伊藤 卓立	
植和田 光晴	
大豆生田淳子	
鍛冶 哲郎	
加藤 泰義	
児玉 昭人	
三枝 紘一	
鈴木 隆雄	

高橋 修	
高橋 喜郎	
瀧田 夏樹	
筑和 正格	
中村 朝子	
西田 英樹	
前田 和美	
三木 正之	
宮原 朗	

トラークル協会事務局
271 千葉県松戸市栄町西 2丁目 870-1
日本大学松戸歯学部独語研究室
Tel 0473-68-6111 (内線 446)

トラークル協会会則

1995 年 9月20日制定

第一条（名称）本会はトラークル協会と称する。

第二条（目的）本会はトラークル文学の普及、及びその研究の促進を図ることを目的とする。

第三条（事業）本会は年 2回総会、及び研究発表会を開催する。また年 1回会報を発行する。その他本会の目的にかなう事業をする。

第四条（会員）本会の会員は広くトラークル文学に関心を有する者とする。

第五条（役員）本会には会長（あるいは代表幹事）をおくことができる。

また若干名の幹事をおく。

会長（あるいは代表幹事）及び幹事は総会において選出する。

会長（あるいは代表幹事）及び幹事の任期は 2年とし、再任を妨げない。

第六条（顧問）本会には顧問をおくことができる。顧問の委嘱は総会で決定する。

第七条（会費）本会の経費は会費、その他の収入をもって支弁し、会費は年額 2000 円とする。

第八条（決算）本会は毎年度決算報告をし、総会に報告する。

第九条（改正）本会則の改正は総会の出席者の 3分の 2以上の賛成を必要とする。

（備考）本協会の事務局所在地を当分のあいだ、日本大学松戸歯学部独語研究室気付とする。